

マレー・ムスリム知識人からみた「災い」

坪井 祐司

本論は、雑誌『カラム』のなかから現代マレー語で一般的に「災害」を意味する“bencana”という語を含む記事を取りあげてその文脈を分析し、そこからうかがえる当時のマレー・ムスリム知識人の災いに対する認識を検討する試論である。

Bencanaとは、サンスクリット語起源の言葉である。イギリス植民地期の1903年に発行されたウィルキンソン(R. J. Wilkinson)¹⁾による英語・マレー語辞書によれば、“Mischiefmaking, trouble especially in the sense of trouble caused by tale-bearing or slander”とある[Wilkinson 2017: 120]。ここでの災害とは、自然災害よりも人為的に引き起こされた災いを意味していると言えよう。

『カラム』記事データベースによる検索の結果、Bencanaという語を本文に含む『カラム』の記事は全体として100件を超える²⁾。その文脈は、自然災害から人災まで、内容も多岐にわたっている。『カラム』はイスラム主義的傾向の強い媒体であることから、そこでは「災い」を宗教と関連付けて言及する傾向がみられる。こうした文脈の検討を通じて、彼らの災害に対する認識、さらには世界観そのものをうかがいあがらせることができよう。

本論では、Bencanaという語を含む記事をいくつかのテーマに分類し、その語がさす内容および文脈について整理してみたい。分類したテーマは、①宗教、②自然災害、③政治、④社会生活の4点である。

1. 宗教

1-1 災いとイスラム

『カラム』には、イスラム教に関する記事が多数あり、そうした宗教的な視点から「災い」に言及する記事や

1) ウィルキンソン(1867-1941)はイギリスの植民地行政官としてマラヤで要職を歴任したが、マレー語や歴史に造詣が深かった。特に教育政策に影響力を発揮し、辞書や文法書の発行にも携わった[Gullick 1992: 370-371]。

2) ただし、データベースは構築途中のため、未入力の記事を含めればさらに多くなると思われる。

叙述がみられる。すなわち、宗教の道から外れることが災いである、もしくは災いをもたらすという認識である。こうした認識に立てば、自然災害か人災かという区別は必要とされない。まずは、そうした事例をいくつか紹介したい。

たとえば、第101号の記事「イスラム知識人と知の発展」は、イスラムにおける知の歴史を描いている。ここでは、健全な理性こそが規則的で平穏な生活をもたらすのであり、「自然災害、戦争、専制的な政治による迫害から守る」ものであると強調している[Qalam 1958.12: 15]。ここでは、自然災害と戦争や専制といった人災が並列的にとらえられていることがわかる。

1952年のハリラヤ(断食月明けの祝祭)前後では、礼拝によって現世・来世の災いから逃れることができる、という記事が書かれる一方で[Qalam 1952.5: 14]、ハリラヤに浮かれて禁止事項を忘れることは災いをもたらす、という社説が掲載された[Qalam 1952.7: 5]。こうした論調から、宗教的に正しい態度をとることが災いを避けることにつながると認識されていることがわかる。裏を返せば、宗教的に正しくなければ、それが災いである、または災いをもたらされる、ということになる。

1-2 望ましくない状況としての災い

現実の社会状況において、イスラムの理想から外れた状況自体が災いとして言及される記事もある。西洋近代的な社会そのものがイスラムから逸脱しており、災いであるという視点である。第9号では、1951年2月にパキスタン・カラチで開催されたイスラム・ウラマー会議において、科学と企業による知の発展を通じた西洋の影響の拡大は災いをもたらしており、イスラムの若者に逸脱の道を提示しているという演説が引用された[Qalam 1951.4: 5]。

1957年のマラヤの独立直後の第89号の記事「イスラムに望ましい経済に向けて」でも、西洋近代・資本主義的な社会経済のしくみが災いとみなされている。イ

スラム的な政治経済政策を実行すれば、現在腹痛・頭痛をもたらす、道徳の墮落を招いている経済の災いから逃れられると主張し、イスラム知識人はそれを実行する責任を負っていると強調した〔*Qalam* 1957.12: 21〕。

さらに、イスラムから逸脱したムスリムの存在も災いとみなされる。第23号の社説「我々の道徳」では、西洋文化がもたらす道徳的な悪影響に懸念を示し、とくに多くの映画について、子供たちに見せないようにする法律を作るべきであると主張した。子供たちが将来成長したときに災いをもたらさざらうからである。道徳の退廃は、利益 (faedah) よりも災いが多く、不道徳の蔓延は災いであると主張した〔*Qalam* 1952.6: 1〕。

『カラム』の主筆エドルスは、1956年に同誌上でエジプトのムスリム同胞団を模した組織の設立を宣言した〔山本 2002: 263〕。第102号のエドルスのコラム「ムスリム同胞団」は、たとえ大きな災いをもたらされたとしても、他者を尊敬せよ、そして勤勉に働け、と説く。もし運命と困窮に身をまかせ、知識もないままにただ仕事を探しているだけでは、降りかかる災いは大きくなるだろうというのである〔*Qalam* 1959.1: 33〕。ムスリムが自助努力によって降りかかる災いの可能性が減ると認識されていることがわかる。

第98号の記事「責任ある人間とは契約を守る人間」では、たとえ困難や災いに直面したとしても、神の法を犯さない限り、イスラム的に責任ある人間とは約束を守る人間であると強調する。そしてムスリムの連帯を強調し、あるムスリムが災いに襲われればすべての人が悲しむとも述べている〔*Qalam* 1958.9: 6〕。こうした記事では、災いとは神が人間にもたらす試練である。宗教的な紐帯によって災いに耐え忍ぶ人間に対して、援助を与えるのも神であると認識される〔*Qalam* 1958.4: 29〕。

こうした記事からは、災いがムスリムの行動に連動して起きるもので、宗教的に望ましくない状況が災いととらえられていることがわかる。その意味で、人間と神 (イスラム) との関係性のなかで、災いとは両者に齟齬が起きたことを示す状態である。そして災いへの対処を経て、両者の関係がより強まっていくことも想定されているといえよう。

2. 自然

現在では災いといったときに自然災害が想定されるケースが多いが、『カラム』のなかで *bencana* という

語が自然災害を指して使用されるケースはあまり多くない。ここでは、数少ない事例を紹介する。

第119号のコラム「苦いコーヒー」では、1960年5月のチリ地震・津波に言及した。このコラムは、主筆エドルスがチュムティ・アルファルーク (Cemeti al-Farouk) という筆名で月号掲載されていた時事コラムである。チリで起こった火山の噴火による地震により、チリから遠く離れた太平洋の対岸の日本にも津波が襲った。約1日後に主に東北地方の太平洋岸で起こった津波では、142名の死者・行方不明者を出した。これに関して、エドルスはマラヤで被害が出たわけではないが、人類が想起しておくべき事実ではないか、と指摘したのである〔*Qalam* 1960.6: 2〕。ここでは、人知を超えた自然災害を超自然的な神の力に帰する考え方が示されている。

第75号の記事「偉大なる神」では、神には災害を起こす力があるとみなされている。古代には、神の意図に反した人間に対して、神はさまざまな自然災害という形で自らの力を示した。現在でも人間は神に逆らうことができない。古代のような自然災害でなくとも、近代的な道具で人間の脳に届く形で力を示すに違いないというのである〔*Qalam* 1956.10: 13〕。ここから、自然災害は神の意志がより原始的な形で示されたものであり、現代の人災はその近代バージョンであるとみなされていることがわかる。

マラヤ (マレー半島) は、地震、台風といった大規模な自然災害は相対的に少ない地域であり、自然災害について『カラム』が触れる機会はそれほど多くはなかった。数少ない例を見ると、自然災害は神の力の表れであると認識されていたことがうかがえる。

3. 政治

『カラム』は政治色の強い雑誌であり、記事の内容も政治にかかわる題材が多い。結果として、「災い」はのぞましくない政治状況を指すケースがしばしば見られた。『カラム』が触れた世界各地の災いについて、具体例をみていきたい。

3-1 冷戦とイスラム主義

『カラム』が発行された1950、60年代は、第二次世界大戦の直後であり、戦争の惨禍の記憶はいまだ生々しかった。さらに、今度は冷戦の対立構造のもとで、東南アジアは両陣営がにらみあう最前線となった。第三次

世界大戦の勃発すら懸念されたのである。

英領植民地であったマラヤ・シンガポールは資本主義陣営に属したが、住民における華人の比率が高いシンガポールでは共産党が一定の勢力を持っており、イデオロギーの対立は激しくなっていた。脱植民地化の時期を迎えたマラヤ・シンガポールでは、指導者たちが新しい国家構想を掲げ、議論を戦わせていた。『カラム』はイスラム国家の建設という立場からこれにくわわった。結果として、さまざまな政治的な対立という災いが生じていたのである。

冷戦下での資本主義・共産主義というイデオロギーは、いずれもイスラム主義の立場からは災いとみなされた。たとえば、第19号の記事「イスラムにおける社会主義」は、資本主義に対する批判がなされている³⁾。記事によれば、資本主義は、個人の自由を基盤としており、この点で社会主義、共産主義とは異なる。資本主義は、それにもとづいた社会正義を生みだすことに成功しなかったことは明らかである。それどころか、社会に災いをもたらした。イスラムのもとづく経済は、個人の権利にもとづく経済システムを擁護はできないという[*Qalam* 1952.2: 16]。これは、個人主義の立場をとる資本主義について、イスラムの立場から災いと述べたものといえる。

さらに、西洋的な民主主義もイスラムと相いれない部分があるとみられた。第32号のコラム「イスラム・政治・民族主義」は、「ムスリム人民の人民による人民のための政治」と題され、イスラムを代表する政治組織の設立を訴えている。「イスラム・政治・民族主義」は不定期に掲載されたコラムで、イスラム主義の立場から政治を論じる内容であった。記事は、イスラムの政治体制はすべて神のためであるべきで、「人民の人民による人民のための政治」のような西洋的な民主主義は、イスラムではありえないと論じた。そして、富の追求や自己愛はすべて災いの原因だと強調したのである[*Qalam* 1953.3: 33]。

一方で、宗教に否定的な共産主義に対しても、『カラム』はイスラムの立場から批判がくわえられた。たとえば、第25号ではコラム「千一問」で共産主義がとりあげられた。「千一問」は、読者からの質問の投稿に対して、編集部が回答する名物コラムである⁴⁾。「なぜ多

くの人が共産主義を非難し、その思想と戦うのでしょうか」という問いに対して、「共産主義思想が物質主義のみにもとづくものであることは明らかである。個人の権利と能力を奪い、イスラムの教えに反する」ものと論じられている。その災いは、マラヤで出版された書籍において観察、見聞されているという[*Qalam* 1952.8: 26]。『カラム』は共産主義と資本主義の対立構造のなかで、その両者が災いをもたらしていると認識していた。

3-2 イスラム世界

国際紛争を指して政治的な災いと言及される場合もあった。中東・イスラム世界は、国際対立の焦点となり、しばしば災いの震源地となった。第6号の記事「エジプトの要求が世界に暗雲をもたらす」は、「朝鮮の事件」(朝鮮戦争)の後の重大な局面は、1950年11月にエジプトがスエズ運河への英軍駐留を認めた条約を破棄したことだと述べた。1869年に建設されたスエズ運河は、1875年にイギリスが経営権を取得し、エジプトの独立を認めて以降(1936年)も軍隊の駐留権を持った。これが世界戦争の原因になりかねず、そうなった場合にいかなる災いに直面するかというのである[*Qalam* 1951.1: 9]。1952年のエジプト革命による王政の廃止とナセル政権の成立を経て、大統領ナセルは1956年7月にスエズ運河の国有化を宣言した。第77号の社説「スエズ運河問題」では、エジプトとイギリス、フランスの対立が深まっていることを伝えた。この問題で第三次世界大戦につながることを懸念し、我々の耳にはかつての戦争の災いの嘆きや叫びが残っている、と結んでいる[*Qalam* 1956.12: 1]。ただし、結果としては、スエズ危機は第二次中東戦争へとつながったものの、アメリカが介入しなかったこともあり、世界大戦にはつながらなかった。

もうひとつ、中東で焦点となった地域がイランであった。1951年の第12号の記事「イランの石油問題が世界を燃やす?」は、アングロ・イラニアン石油会社の国有化をめぐる問題を扱っている。同社は戦前からイランの石油採掘を行ってきたが、モサッデグ政権は石油の国有化を進めようとした。『カラム』はモサッデグに対して同情的であった。イランの石油を米ソ両陣営がとりあっており、モサッデグはロシアの災いから国家を守ろうとしているとみなされたのである[*Qalam* 1951.7: 19]。モサッデグ政権は、戒厳令をしいてアングロ・イラニアン石油会社の操業を停止させ

3) この記事は、『アル・ヒラル』という媒体からの引用であると明記されているが、この媒体の詳細は不明である。

4) 読者から寄せられた質問に対して編集部のアブ＝アルモフタル(Abu al-Mokhtar)と委員会が回答する形式をとる。実際の回答者は不明だが、エドルスなど中核的な編集者によって担われていた可能性が高い。

た。しかし、イギリスは世界石油資本と共同してイラン原油の締め出しを行い、イランは減産に追い込まれて財政的打撃を受けた。1953年には軍部のクーデターによってモサッデグ政権が倒れ、パフレヴィー2世の専制政治が復活、イランの油田の国際資本の管理のもとに置かれた。

3-3 インドネシアにおける専制政治

マラヤの隣国インドネシア情勢にも、『カラム』は重大な関心を寄せていた。ここで災いとみなされたのは、大統領スカルノの専制的な政治であった。『カラム』は、幾度となくスカルノの独裁体制を批判した。

主筆エドルスは、インドネシアに関する多くの記事を書いている。第34号のエドルスによるコラム「インドネシアにおけるイスラムの状況」は、インドネシアにおけるイスラムと共産主義について論じた記事である。エドルスは、当初スカルノをインドネシア独立の英雄として評価していたが、その後批判に転じた。その理由は、スカルノが「パンチャシラ(建国五原則)」国家を目指すことを表明し、イスラム国家を否定する態度を取ったためである。ナショナリズムをイスラムに対して優先する姿勢は、イスラム主義の知識人には受け入れられないものであった。スカルノのこの政治姿勢により、インドネシアではイスラム国家の建設はムスリムの義務ではないという理解が支持されるようになり、多くのインドネシア人が社会主義、共産主義の支持者となるに至っているとエドルスは主張した。このため、現在イスラム主義者が共産主義の災いを人々に周知しているような状況だというのである〔*Qalam* 1953.5:35〕。

1955年に行われたインドネシア総選挙の結果、インドネシア議会は国民党、マシュミ、ナフダトゥル・ウラマなどのイスラム政党、共産党がそれぞれ拮抗した勢力を持ち、こう着状態に陥った。第68号の社説「宗教の協働」では、イスラム政党が期待通りの勝利を収められず、共産党が勢力を保った選挙結果を受けて、共産主義の災いを想起せよ!と強調している〔*Qalam* 1956.3:5〕。

その後、1961年にマレーシア構想(すでに独立していたマラヤ連邦にイギリス自治領であったシンガポール、ボルネオのサラワク、ブルネイと現在のサバにあたる北ボルネオを統合し、一つの国家とする案)が発表されると、インドネシアはそれに猛反対し、両国は一触即発の状況となった。『カラム』によるスカ

ルノ批判は、この時期に拍車がかかった。第150号の記事「スカルノの政治的拡大」では、1962年12月のマレーシア構想に反対したブルネイの左派勢力・ブルネイ人民党の反乱についてとりあげた。同党の反乱はスカルノ政権が糸を引いていたとされており、『カラム』はスカルノの領土的野心が明らかになったと批判した。スカルノは、マレーシア構想をイギリスの新植民地主義と批判したが、『カラム』は、スカルノこそがボルネオ、マラヤの占領をもくろむ新植民地主義であるとして反発した。国際連合の生命線は、第三次世界大戦の災いを避けることであるとして、戦争により人類の英知が破壊される前に国際組織を利用して問題を解決すべきと訴えたのである〔*Qalam* 1963.1:21〕。

3-4 マラヤにおけるマレー・ムスリムの政治的分裂

『カラム』が最も多く言及したのは、むろん地元マラヤの政治状況であった。この時代、マラヤ・シンガポールでは災いといしか言いようのないさまざまな悲劇的な事件が起こった。マラヤ共産党が1948年に武装蜂起すると、対抗してイギリス政府は非常事態を発令し、内戦状態になったのである。第19号の社説「観察すべきこと」は、「イスラム教徒の感情を理解しなかったために1950年12月11日に起こった災い」について言及している〔*Qalam* 1952.2:3〕。これは、シンガポールにて起こったムスリムの蜂起(ナドラ事件)を指す。第二次大戦中にムスリムに引き取られ、育てられたオランダ人少女のイスラムへの改宗・結婚を否定する判決を出した裁判所へのムスリムの抗議行動は、17名の死者を出した。これを機に多くのムスリム急進派指導者が逮捕され、非常事態下での弾圧が進んだ。さらに、第16号の社説「明らかな影響」で災いとして言及されているのは、1951年10月6日に起こったマラヤ共産党のゲリラ部隊によるマラヤ高等弁務官ガーニー(H. Gurney)の暗殺である〔*Qalam* 1951.11:1〕。この事件は、共産党によるゲリラ活動がピークを迎えたことを象徴する事件であった。その後任のテンプレーによる地方部の華人の強制移住による封じ込め作戦により、ゲリラ活動は沈静化するが、政治・軍事的な緊張状況は続いた。

政治的にも、マラヤにおけるマレー人と華人、インド人という民衆の対立が先鋭化した。そして、マレー・ムスリムの内部も政治的に分裂し対立する状況が生じ、これが災いを見なされた。第6号のコラム「祖国情勢」は、マレー人とマラヤ人を称する非マレー人と

の慣習・文化の違いを強調した。「祖国情勢」は祖国(マラヤ)政治に関する不定期コラムで、この記事の著者はマレー人左派⁵⁾のブルハヌッディン・アルヘルミ(Burhanuddin Al-Helmy)⁶⁾であった。マラヤンとは「マラヤ人」のことであり、華人やインド人は自らをマラヤ生まれであると強調することで、出生地主義をもとにマレー人と同等な権利を要求したのである。戦後のマラヤでは、政治的な権利はマレー(民族)かマラヤ(出生地)を原則とするかが大きな争点となった。マレー人政治家のなかでも、この問題をめぐって意見が分かれた。UMNO(統一マレー人国民組織)初代総裁ダト・オンは、出生地主義を評価し、UMNOを追われた。このような状況を指して、ブルハヌッディンは、我が民族の政治家に観察されるのは政治的分裂という災いだと呼び出したのである[*Qalam* 1951.1:11]。

この分裂は、イスラム主義者と民族主義者の対立であった。『カラム』がイスラムの紐帯を前面に押し出したのに対して、のちにマラヤ独立後に政権を担うUMNOは民族を強調した。『カラム』は、UMNOとマラヤの民族主義者を批判した。第12号の「祖国情勢」は、「ムスリム同胞よ、団結せよ!」と題されており、執筆者はエドルスであった。記事は、アフマド・ファド・ハッサン(Ahmad Fuad Hassan)の文章を引用した。彼は当時指導的な立場にいたウラマーで、当初UMNOに参加していたが、後にPAS⁷⁾に参加することになる。ウラマーの対立はマレー・ムスリムの安寧に災いをもたらすとして団結を訴えるアフマド・ファドの文章を引きつつ、エドルスはウラマーがUMNO派と反UMNO派に分裂していることを懸念した[*Qalam* 1951.7:39]。

第9号の「祖国情勢」では、エドルスが「連邦総選挙の意味」と題して、1955年に予定される総選挙について論じた。エドルスは、民族の「マラヤン化」を進めようとする動きがあると警告した。これは、マレー人政党のUMNOが華人政党のMCA(マラヤ華人協会)、

インド人政党のMIC(マラヤインド人会議)と連盟党(Alliance)を結成し、多民族の政党ブロックとして選挙に臨む動きを指す⁸⁾。エドルスは、各民族の指導者により提出される構想を注視する必要があると主張した。(理性ではなく)本能に支配された構想は、しばしば一般に災いをもたらすと強調した[*Qalam* 1951.4:30]。マレー・ムスリムが他民族の政党と連携することを批判し、災いをもたらすと主張したのである。

『カラム』の反対にもかかわらず、連盟党は1955年の総選挙にて大勝した。そして、マラヤは、連盟党の主導により1957年に独立を果たす。第87号の社説「独立」では、マラヤ連邦の独立について扱っている。『カラム』は、独立の政治的な熱狂からは一歩引いた立場をとり、指導者たちに責任あるかじ取り、すべての利益を求め、連邦国家と人民への災いを避けることを求めた。セイロン、インド、パキスタン、ビルマ、フィリピン、インドネシアなどの各国の状況、とくにインドネシアの混乱を他山の石とすることを求めた[*Qalam* 1957.10:1]。当時、ここに挙げられた南アジア・東南アジア各国は独立後の民族・宗教間の対立により国民統合に苦しんでおり、それが災いととらえられたのである。

マラヤ・マレーシアの議会において、UMNOへの対抗勢力となった一つがイスラム政党のPASであった。PASは、もともとウラマーの組織であり、UMNOに属するウラマーも多く、UMNOへの参加も検討されたが、結局加わることなく、UMNOに反対するウラマーの加入により方針を転換した。マラヤ独立の年の第78号の社説「[PAS]大会を迎えて」は、PASの大会に対する論評である。そこでは、我々は神により整えられたイデオロギーを持っており、その実現に努めなければ大きな災いが起こるとして、「PAS」の重要な責務は将来の可能性に対処するため力を蓄えることであると論じた[*Qalam* 1957.1:-3]。『カラム』はその後もPASと立場を共有しながらも、思い通りにならない状況ではときに厳しく批判していくことになる⁹⁾。

『カラム』で**bencana**という語が使用された例で、最も多かったのが政治関連の記事であった。『カラム』の発行期間は、世界的に紛争が多発した時期であり、

5) マレー・ナショナリズムの主流派となった穏健派勢力に対抗し、イギリスからの即時独立を主張した急進派はマレー人左派(Malay Left)と呼ばれた。

6) ブルハヌッディン(1911-1969)はマレー人左派の指導者の一人であった。彼は1950年にシンガポールでナドラ問題(先述)の抗議に携わるが、暴動により逮捕された。釈放後はマラヤに戻り、1956年にPASの党首となった。伝記として[Ramlah 2003]がある。

7) PASの起源は、1951年に結成された全マラヤ・ウラマー協会(Persatuan Alim-ulama Se-Malaya)であった。当初はUMNOとのメンバーの重なりもみられたが、非常事態のもとで弾圧された急進派のウラマーが加入し、連盟党を結成して華人との連携に舵を切ったUMNOに対する批判を強めた[Farish 2014]。

8) 連盟党は、1952年のクアラルンプル市の市議選にむけてUMNOとMCAが同盟したことで成立し、1954年にMICが加入して三民族の政党ブロックとなった。

9) 初期の『カラム』の執筆者でのちにPASの総裁となったブルハヌッディンに対しても、渡英して議会を視察するとの報に際し、イスラムの構想を闘争するというのは本当なのかと厳しく批判した[*Qalam* 1960.6:6]。

人々にとって望ましからざる災いが生じた。くわえて、イスラム主義の『カラム』にとっては、ムスリムが多数を占める地域で世俗的な民族主義勢力が独立国家を建設する過程も災いとみなされたのである。

4. 社会

4-1 イスラム知識人からみた女性

ムスリムが社会生活を送るなかで直面した問題も、日常的なテーマとして『カラム』のなかでとりあげられた。シンガポールはムスリムが少数派であり、日々の暮らしの中で非ムスリムとの接触は不可避であった。そのなかで、イスラム的な正しさをいかに確保するかが重要視された。第二次世界大戦は、多くの死や家族の離散など、社会に大きな影響をもたらした。一方で、戦後には急速な近代化が顕著となり、女性社会進出が起こった。『カラム』のイスラム主義の視点からは、ジェンダーの価値観が揺さぶられ、災いとらえられる現象が起こった。

初期の『カラム』では、ウム・モフシン(Umu Mokhsin)という筆者により、「女性の権利と自由」というコラムが連載された。ウム・モフシンとは、主筆エドルス of 筆名の一つであったとされる(本論集の光成論文を参照)。このコラムは、同時代のシンガポールの女性の立場について、同誌の見解が示された場といえよう。

しばしば出現するのは、自由な男女の交際が災いをもたらすという認識である。第5号では、イスラムの禁止を破って女性と交わろうとする男性からの無限の災いが女性に対してたらされるのを目にしてきていると書いた[*Qalam* 1950.12: 19]。女性の交際や服装のあり方について触れた第10号の同コラムでは、神が女性に親族以外の男性との交際を禁じているのは、男女の交際は利益(manfaat)よりも災いをもたらすからであると強調した。たとえ利益があったとしても、それは求められるべき利益ではないというのである[*Qalam* 1951.5: 14]。

コラム「千一問」でも、男女交際はしばしばとりあげられたテーマであった。第14号の「千一問」では、学校で同じクラス的女子を見つめることの是非を問う質問に対して、それは禁止であると強調した。そこでは、我々自身が災難を見てきており、イスラム法は、成人した男女のアウラを定めており、男女が交際することや見つめ合うことを禁止していることは明らかであると述べた[*Qalam* 1951.9: 39]。第31号の「千

一問」では、男性と女性が手紙を出し合うことで関係を持つことの是非を尋ねる質問が投稿された。これに対して、文通自体は禁じられてはいないが、そこから生じる結果として災いや退廃をもたらす行為はイスラム法によって禁じられていると回答された[*Qalam* 1953.2: 42]。

第11号の「女性の権利と自由」では、女性のアウラ(男性に対して隠すべき体の部分)の境界について論じている。ベールをしても、中途半端に髪が出ている場合、アウラを開く違反というだけでなく、社会に災いをもたらすと主張する。これは、ムスリムが今まねようとしている西洋人社会に起こっている災いであるという。ただ知識を身につければよいというものではなく、宗教的な禁止は災いであることを認識すべきと説いたのである[*Qalam* 1951.6: 27-28]。

4-2 家族制度と女性

第8号の「女性の権利と自由」は、離婚(talak)についてとりあげた。マラヤ・シンガポールにおいて、ムスリムの離婚率の高さがしばしば指摘され、ムスリムの間でも問題視された。記事は、離婚は社会に災いをもたらすものであり、イスラムの生活の家庭の良さと完全性は社会にかかっていると主張した[*Qalam* 1951.3: 34]。第21号では、エドルスが「妻の結婚と離婚」という記事を書き、熟慮せずに行われた離婚は災いをもたらしており、社会、特に子供への影響が大きいと主張した[*Qalam* 1952.4: 4]。第114号の社説「強制された離婚？」は、結婚登録制度を論じた記事である。そこでも安易な離婚に言及され、離婚がもたらす最大の結果は、子供に犠牲を強いることであり、これは大きな災いであると主張したのである[*Qalam* 1960.1: 3]。

ほかにも、一夫多妻制をとりあげた第138号のコラム「イスラムにおける一夫多妻制」では、緊急な場合を除き、複数の妻帯を認めるべきではないと主張した。それにより、そこから生じるさまざまな災いを避けることができ、遅れた国が先進的な民族のラインに上昇することができるかと主張した[*Qalam* 1962.1: 13]。ここでは、西洋近代を災いと認識しながらも、西洋近代的な基準にもとづいて離婚を減らし、近代主義者からの批判をかわそうとする価値観が見られる。

この時期よく議論されたテーマが、産児制限や妊娠中絶であった。人口増加の抑制は大きな政策課題であったが、それは宗教と関係する問題でもあったため

参考文献

- Farish A. Noor. 2014. *The Malaysian Islamic Party 1951-2013: Islamism in a Mottled Nation*. Amsterdam: Amsterdam University Press.
- Gullick, J. M. 1992. *Rulers and Residents*. Singapore: Oxford University Press.
- Ramlah Adam. 2003 [1996]. *Burhanuddin Al-Helmy: Suatu Kemelut Politik*. Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka.
- Wilkinson, R. J. 2017 [1903]. *A Malay-English Dictionary*. Kuala Lumpur: Akademi Jawi Malaysia.
- 山本博之 2002 「資料紹介『カラム』」『上智アジア学』20、pp. 259-343。

である。『カラム』は、産児制限はやむを得ない場合において許容されるとしたものの、中絶については反対した。神の意志にもとづく生命の成長を中断させるためである。産児制限、中絶問題を扱った第106号の社説「ファトワ委員会」では、中絶に反対し、子宮における受精卵の成長、胎児の成長を経るなかで、もし中絶したらどのような災いがあるかをひとつひとつ説明すべきであると述べた〔*Qalam* 1959.5: 3〕。第61号の「千一間」では、家族計画と産児制限は中絶と関連付けることは可能かという問いについて、ウラマーらは禁止かどうかの法的判断を下す前に、既に母親の子宮に宿った胎児を墮ろすことによる本人に及ぼす結果または災い、あるいは、もしあるとすれば、利益についてまずは調査すべきであると回答した〔*Qalam* 1955.8: 39〕。

女性をめぐる問題は、西洋近代性への評価と表裏一体であった。『カラム』は、近代化、女性の社会進出自体を否定はしなかったが、その結果としての社会的な影響を災いとみなし、それを宗教の力で抑制しようとしたのである。

おわりに

本論では、『カラム』記事に現れる「災い」という語に投影された当時のイスラム知識人の認識を分析した。暫定的な結論は以下のとおりである。

第一に、災いとは人間の力を越えた望ましからざる状態を幅広くさした。『カラム』知識人にとって、災いをもたらす主体は神であった。そこでは、自然災害であるか人災であるかは区別される必要はなかった。

第二に、災いは神と人間の関係性から起こるものであり、人間が宗教的に正しくあることで、災いを回避できると考えられた。逆に言えば、災いが起こったということは、宗教的に正しくなかったと解釈される。

第三に、災いは、人間のふるまいを見直す契機とみなされた。さまざまな災いを自らの視点で解釈し、災いを避けるために宗教的な正しさを訴えた。災害を自らの宗教観、世界観のなかに取り込むことで、自身のイスラム主義の主張へとつなげていったのである。